

---

# 報われるのはお互い様

怠惰なぼっち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

報われるのはお互い様

### 【Zコード】

Z3826BA

### 【作者名】

怠惰なぼっち

### 【あらすじ】

注意！この小説には知的障害者の登場人物等が登場します。障害者差別、人としておかしい等を思う方の閲覧はご控えください。

## 第1話

「はあ……」

中学校つて案外面白くないんだな……

「どうしたんだよ、星河？」

「え？俺？」

「お前以外いないだろ……疲れてんのか？」

「わ、なんだうな、はは」

「……あわ、」

「どうした？急に声小さくして」

「……お前、雪乃さんと幼馴染なんだって？」

「……それがどうかしたか？」

「……よなーあんな可愛い子がそー」

「わうか？」

「それに真面目うつだし、学級委員なんか自分から立候補したし」

「……おあな……」

「後さ、お前の隣の席の大野さん可愛くね？」

「お前良く見てるなあ……」

「お前良く見てるなあ……」

「可愛い子には目が無いんでね」

「あひや」

「何だよー」

キーンゴーンカーンゴーン

丁度チャイムが鳴った。俺はこの時、あんな事に巻き込まれると思わなかつた。

## 第2話

放課後、校舎裏に来てほしいと大野から言われ、俺は校舎裏に来た。さつきいた明島に茶化されたが

スルーして校舎裏に来た。すると約束どおり大野がいた。

「何で俺を呼び出したんだ？」

「…今から言う事は、誰にも言わないでほしい。」

「…へ？」

「…私は、この時代の人間では無い。」

「…？」

「つまり、私は未来から来た。」

「未来…？」どういふことだ？」

「私は未来から今の時代を変える為に来た。」

「…何故？」

「…あなたの親友の雪乃里奈は強大な力を持つ超能力者。」

「ちよづのつ…りょくしゃ？」

「そう。私は未来の地球連邦政府の指令を受け雪乃里奈の護衛を依頼された。」

「…？」

「私達は10年後の世界から来た。その世界では地球侵略を目的とした異星人の前に降伏寸前まで追い詰められている。私は地球連邦政府の最後の指令でここに来た。」

「その…話がでかすぎて良く分かんないけど、つまり里奈の力があれば地球を救える…って事か？」

「ええ。」

「でも、10年後なんて里奈は普通に生きてるんじゃないのか？」

「…言い辛い話ですが、彼女は15歳の頃に死亡します。」

「…え…ウソだろ…？」

「嘘ではありません。彼女は残虐的な行為をされ続け、凌辱の限りを尽くされ、最後は自殺します。」

「ふざけんな！いぐらなんでもな…」

「私は未来から来ました。彼女のデータを研究した結果16歳の頃能力が覚醒、力を使えるようになります。それまではただ普通の中学生。そこであなたにお願いがある。」

「…何だ？」

「あなたには彼女を守つてもらいたい。」

「……はあ？別に未来から来たお前が……」

「……未来から来た人間は過去の人間への干渉は行えない。」

「……それで俺なのか？」

「そう。それにあなたは彼女に最も近い存在。」

「……」

「あなたは、明日から彼女を守るよう。そしてこの話は他者に話してはならない。」

「……分かつたよ、守れなんて前に言われたこともあったし、まあ大丈夫だ。」

「……私はあなたへのフォローをさせてもらひ。」

「……りょーかい」

正直、信じられなかつた。里奈が超能力者で、後3年ほどで自殺すること、未来から阻止する為に来た

未来人の話、だが俺にはそれら全てが信じられた。

### 第3話

翌日。俺は早速明島や他の男子生徒に話しかけられた。

「お前、大野さんには昨日されたのーー?」

「いや、それ驟だけじゃ」

「お前やるなあー」

「どんな感じ?やっぱ可愛かった?」

「あーあ、俺も彼女ほしいー」

「星河、お前、俺の天使をよくも…」

俺はクラスメートの男子でテーマである事を伝え、テーマの発信源は明島であることが分かった。

「お前よくも!テーマを流してくれたな…」

「だつてあの状況じゃ考えんじゃんー」

「おこ、ちゅうじゅうちゅうこー

「怒るなってー謝るからーー!」めんーー

キーンコーンカーンコーン

「では、朝の会を終わります」

学級委員つて言つのはかなり辛いと思つんだけどな、と俺は思つた。勿論、里奈が自ら進んでやつたわけじゃないんだが。

明島はすぐ俺に話しかけてきた。

「なあ、俺雪乃さんに告白しようとしたけど、いいかな?」

「は? ああ、勝手にすれば… 痛い痛い痛い痛い!」

「ちよつと来てほしー」

（廊下）

「何だよ、急ご。」

「彼女、雪乃さんは内気な性格であるのは知つている。」

「いや、知つてるけど」

「それじゃあ、何故勝手にしお等と言つた?」

「いや、そんなの個人の自由なんじゃないかと…」

「…多分彼女はどんなに顔の整つていらない生徒の告白も受け入れてしまつ。よつてあなたはそつなる前にあの男を駆逐するべきです。」

「駆逐つて…」

「…」

「…まあここへ、せこへと心止めたよへじな、

「…助かる。すまなかつた。」

「ここの、かく者えりやねつだしな、

（教室）

「僕ー僕ー」

「はー、じやあ田島君

「えーー何で違うのーーじつじつと違うなーー

「あー、ちよつと違うなーー

「えーー何で違うのーーじつじつと違うなーー

「ほり、席につけ

「嫌だーー僕が正しいーー

「またかよ…ハア…

「なあ、アイツ何なんだ？」

「え? アイツ?」

「星河なら何か知ってるんじゃないかと…」

「樹野、寧ろお前こそ知つてると俺は思つたんだが」

「そーな、ただこのクラスに知的障害者がいるつていのは聞いてた」

「ほり知つてた。」

「馬鹿言つなよ、俺だつてさつて他のクラスの奴から聞いたんだぜ？にしてもあれは重度かね？」

「さあ？でも酷かつたら支援学級行つてるだろ」

「その辺良く分かりません」

「樹野でも分かんないのか…」

「ちよつと職員室連れて行くぞ」

「分かりました」

「先生どつか行つた…」

（学活の時間）

「えー、今日田島君は早退した。彼は知的障害者だが、彼を馬鹿にしてはいけない。そういう差別が～」

「といつことで、田島君の助け等は学級委員の仕事にしようと思つ。」

「

「…？」

「クラスの代表として、内野君と雪乃さんにやつてもいいね」と思つ  
んだが、反対する人はいるわけないよな？」

「あの…」

「何だ？星河、何か疑問に思つ？」とでも？

「それは学級委員の仕事では無いと思ひますが…」

「…あのなあ、差別は行けないぞ？大体なあ、そもそも～」

話長え…

「内野つてさ、大丈夫かな？雪乃さんも」

「分からん、にしてもウチの担任話わかんねー阿呆だな」

そして放課後。俺は大野に渡したいものがあると言われた。

「渡したいものがある」

俺は教室でそう言われた。もちろんあの未来関係だとは思つが。

「渡したかったものはこれです。」

「何だこれ…？」定規？」

渡されたのは30cmの定規だ。これをどうじるところのか

「それは、通常の定規ではない。」

「へ？」

「未来で特殊生産されている護身用の武器の強化版。」

「はあ…定規が…？」

「気をつける、人間の腕なんて簡単に斬れる。」

「うわ…こんな渡すなよ…」

「それを持っていれば、あなたは彼女を守れる。」

「つまり、里奈を襲う奴がいたらこの定規で…？」

「他に扱いやすいものがあつたら私に言つてほしい。そうすればま

た作れる。」

「ただ、これどう持てばいいんだ?」

「斬れる部分はこの10cmの部分。ただし刃物では無いので問題ない。」

「これ職質されたらアウトだろ…しかも軽すぎるので、これ本当に大丈夫なのか?」

「素材は10年後で既に開発されている超波動合金製。ダイヤモンドに匹敵する強度と硬度、日本刀には及ばないがそれに非常に近い斬れ味がある。」

「あ、ぶねーな、これ」

「斬れる部分意外でなら殴る用途としても使える。例えばここにあるよ。」

「ああ、」

「斬れる部分でやつてみろ」

「いひつか」

すると岩は砕々に砕けた。

「ついでに叩け」

すると岩は砕々に砕けた。

「決して悪用はしないでほしい。彼女を守る為のみに使つてほしい」

「分かつたよ、とりあえずサンキュー」

（翌日）

例の田島は相変わらず授業妨害を繰り返している。本人はその自覚が無いのだろうが、クラスの中には「アイツ邪魔」と思っている人が少なからずいる。

俺はこんな事を耳にした。

「なあ、A組の翔が雪乃さんに告白するの知りしげ?」

「へー、でも玉砕すると思つたがなー」

「何言つてんだよお前」

明島と話していたら後ろにいた榎野が首を突っ込んできた。

「A組の早川 翔つて早くも数人の女子に告白されてるんだぞ?そりやあ雪乃さんもあれだろ…」

「あーあ、俺の天使が…」

「へー、で、いつするとかも分かるの?..」

「俺、そこまでは知らん」

明島は使えない奴だな、まあ小学校の頃から分かつてはいたが。

「何でも今日の放課後つて本人自ら語つてみるよ?」

「樹野つてよくそんなの知つてるなあ…」

「まあ、情報通で通つてるからな、ただこの早川翔にはあまり良い噂が無い」

「やうなのか?」

「まあ、喫煙してた等の田舎証言から中3の先輩のヤンキーと繋がつてゐるとか…」

「お前相談部みたいな部活作れよ」

「じゃあお前入つてくれるか?」

「いやー、めんどくさいしなー」

「だよな、それに勉強に打ち込みたいし」

「俺は入るぞ」

「明島なんか役に立ちません。」

「それより、俺はその翔なんかが雪乃さんと付き合はるとこつのがすげー嫌なんだが、対策とかないか?」

「まあ、彼は見た目は好青年でそういう噂も一部の嫉妬した男子のデマだとかも…」

「…」

「何で俺の方見るんだよー! だつて勘違いするだろー!」

「まあ、素直に負けを認めましょ。」

「そうだな」

「クソツ、余裕そうな顔しやがつて」

実際、全然余裕じゃない。これを阻止出来なかつたら大野に消され  
るかもしれない。

とにかく、何とかして対策を考えないと…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3826ba/>

---

報われないのはお互い様

2012年1月10日21時02分発行